
深夜の客

川崎ゆきお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深夜の客

【コード】

N2320M

【作者名】

川崎ゆきお

【あらすじ】

美佐子はそのカウンター席に、誰かが座っているのを見る。

深夜、美佐子は友達とファミレスで喋り、その帰り道、喫茶店の前を自転車で通り過ぎようとした。

友達の恋愛話で遅くなり、もう丑三つ時だ。こんな時間に走るのは滅多にないが、よく知った通りだけに怖さはない。

喫茶店は当然閉まっているのだが、常備灯のかすかな明かりで店内がよく見える。窓もドアも大きなガラス張りのため視認性が非常によい。

ボックス席とカウンター席のある、ほどほどに広い個人営業の喫茶店だ。

美佐子はそのカウンター席に、誰かが座っているのを見る。錯覚ではない証拠に、その人は動いている。足を組み直したり、腕を延ばしたりしている。

美佐子は自転車を止め、見入ってしまった。

ふとその人が振り返った。美佐子が見ているのに気づいたためだろうか。美佐子のはつきりと顔を見た。

その喫茶店のバイトと美佐子は同級生だった。彼女に昨夜のことを話した。

「幽霊？」

「そう、昨日見たんだ。思い当たることない」

美佐子はその幽霊の人相や服装を言った。

年配の男だ。

「そういうお客さん多いからね。ママに聞いてみる」

ママはその話を聞き、思い当たることがあるようで、しばらく表情が固まっていた。

一年前まで来ていた客らしい。

常連さんで、いつもカウンターでコーヒーを飲み、軽く世間話をして帰る客だった。

病気で入院していたらしく、退院後、昼間店が暇な時間帯によく来るようになっていた。話し好きな人だったようだ。

地元の建設会社や不動産屋の親父達が来るようになってから、カウンター席は彼らが独占し、ママさんも彼らと話すことが多くなった。バイトの女の子はこの親父達の相手をするのをいやがった。

大きな声で女の子に聞こえるように猥談をしたり、彼氏との関係なども聞いてくる。

そんな時、彼らに突っ込みをいれたのがあの人だった。

商売柄か声が大きく、遠慮のない言葉で、その人の突っ込みを跳ね返した。口論になったがその人に勝ち目はない。

翌日から来なくなつた。その人は席を降りたのだ。

それから一年経過している。ママはそれ以上想像しなくなつた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2320m/>

深夜の客

2010年10月28日07時57分発行